

富山大学教育学部附属教育実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Education, Toyama University

第21号

(2005年3月31日発行)



「子どもとのふれあい体験」で子どもの遊びを援助する学生

センターニュース21号 目次

- | | | |
|----|------|----------------------------|
| 02 | 巻頭言 | センターはどんな役割を担ったらよいのか |
| 03 | 提言 | 人間発達科学部と教員養成 |
| 04 | 報告 | 第3回発達と臨床の心理学講座 |
| 05 | 報告 | 人間関係作りゲームの研修会 |
| 06 | 報告 | 相談室から 母親の笑顔を支える |
| 07 | 寄稿 | 学部および附属学校共同研究プロジェクトが示唆するもの |
| 08 | 学園通信 | 〔幼稚園では、小学校では〕 |
| 09 | 学園通信 | 〔中学校では、養護学校では〕 |
| 10 | 報告 | マルチメディアセミナー |
| 11 | 報告 | ビジュアル・トライアスロン2004 |
| 12 | 報告 | 国際理解教育・開発教育研修会 |
| 13 | 報告 | 子どもとのふれあい体験 |
| 14 | 報告 | 放課後学習チューター・学習活動サポート事業 |
| 15 | 報告 | センター協議会・教大協北陸地区会議 |
| 16 | 業務報告 | 平成16年度の実践センターの主な行事 |

センター長 市瀬 和義

昨年(2004年)9月、佐伯先生からセンター長を引き継いだ。私にとってはこのことは、正に「青天の霹靂」であった。というのも、それまで、「センターはまだその機能を果たしていない。何をやっているのか明確でない」と端から文句ばかり言ってきたからである。それが、よりによって、自分でやらなければならない羽目になるとは・・・、予想だにできなかったことだった。言い出しっぺは損をする。「なら。お前やってみろ」と言われたのかもしれない。

中に入って半年、センターの各部門の先生方がそれぞれ、真剣に様々な活動と取り組んでいることをあらゆるところで目の当たりにし、私が文句を言ってきたことが、多少間違いであったことに気づいた。

ただ、それがあまり目につかないので誤解を生みやすくなっているし、評価もされにくい。

大学の果たす役割として研究・教育・地域貢献の3つが上げられる。これまで、大学では、重要さをこの順番で考えていた。そのため、地域貢献は評価が低く、単に好きな人がボランティアで行っているようなものとか、大学の教員にとって一番は研究で有り、研究さえやっていたら文句は言われなかったという調子の考えが多くを占めていた。しかし、今、富山大学が独立法人となり、特色ある大学を目指すとき、地域連携は大事な柱となってきている。夢大学にしろ、公開講座にしろ、立派な「本務」であると私は言いたい。そして、表にはなかなか出ない地域貢献を、しっかりと評価するシステムが欲しいと感ずる。

今年の10月に富山大学は3大学が統合し、新しい大学としてスタートする。教育学部が人間発達科学部となる、センターも名を「人間発達科学研究実践総合センター」と改める。ここで注目したいのが、今まで「教育実践・・・」となっていたところが「研究実践・・・」となったところである。つまり実践を研究にしなければならない。いわゆる「実践学」の構築が求められている。

新しい学部が「個性豊かで教育実践力をもった教員の育成」を目指すとき、教員養成や現職教員の再教育の中心となり、その核になるのは、我々センターである。その強い認識がまず必要となる。それを具体的に考えると、

- ①児童生徒の心身の悩みに対応できるカウンセリング力をもった教員
- ②実践的で高い見識に立つ教員
- ③豊かな教育技術を身につけた教員

が望まれてくる。そしてその目的達成のため、大学は広く門戸を開け、知を惜しみなく提供し、協力する。センターはこうした大学の教員と現場の教師を結ぶ大きなパイプ役を果たすことが望まれる。地域が大学を大いに利用・活用し、大学教員も地域からたくさんのもので得ていく、そのことの中にこそ、本当の意味での連携があると考えられる。

「大学は敷居がどうも高くって」という言葉をよく耳にする。いろいろと聞きたいし、力になってほしいのだけれど、どうもとっつきが悪いらしい。それは、大学の教員が、地域から何か言ってくるのを待っているのみで、積極的にこちらから地域に出かけていかず、地域に働きかけないからである。もしこちらから先に言えば、どんなにか地域の人が話しやすく、相談しやすくなるかもしれない。

センターの紀要も他大学では、現場の教師のために、実践報告形式で自由に投稿できる領域を作っているところもある。学校の多くの仲間と各学校でまとめをすることは多いが、一人でどこの学校に行っても追究できるテーマを持ち研究をする体制にはなっていない。教師が自分の実践を冷静に見つめ、そこから何か新しいものを創り上げていく、大変だけど大事なことであり、その教師の一生の核になるものであると思う。

そして、何よりも、実践から学べる「実践学」を構築していく、その間に入り、教師の希望を叶えるべく支援していく、そんなセンターになったらいいなと思う昨今である。

提 言

人間発達科学部と教員養成

センター教授 塚野 州一

いよいよ来年度から、教育学部は人間発達科学部に生まれ変わる。長年教育学部に籍をおいた身として、新学部の発展を心から願っている。新学部の発足に際していくつかの懸念や不安を抱くが、その一つは、教育学部の主な使命であった教員養成をどう担っていくのかである。師範学校以来、県内の教員養成と研修に貢献してきた教育学部としての機能をこれまで通り、いやそれにもまして手堅く維持・発展させ、教員養成の実をあげていくことが学内外からの要望であろう。

人間発達科学部でこれまでになかった新たな就職先を開拓することは当然努力する必要がある。だが教員養成を確実に担うことは、就職先をすくなくも手堅く確保できるという意味がある。それどころか近年の教員需給の動向から、教員の採用に大きな需要を期待できるように思われるのである。

最近特に大都市を中心に教員不足の実態が深刻になってきたと言われ始めている。

東大の荻谷教授が、「少子化時代の怪 教員が大量に不足するー義務教育を襲う地殻変動」(論座2005年3月号：朝日新聞)で、この間の事情を数的な裏付けをしながら説明している。

まず、平成17年度から30年度までの、退職予定教員数と子どもの数の変動に伴う教員減少数をもとに、毎年必要となる新規教員採用数、教員養成課程の入学定員などを算出した。その上で、法人化後の国立大学の教員養成学部の入学定員9730人として、需給関係を検討した。

その結果は、端的に言えば、近い将来、わが国には、いびつな公立小・中学校教員の年齢構成のせいで、10年以上にわたり、義務教育費の負担増とその財政事情逼迫の中で生じる大量の教員不足が生じるという。

小中学校あわせ、平成17年度以後、毎年1万から2万人の教員需要が発生するがほとんどの年は1万5千人を上回る需要である。この状態が15年以上続く。したがって国立大学の教員養成課程だけで需要はとうてい追いつかない。これを累積数で見ると、平成17年度から32年度までの16年間に生じる教員需要の合計は25万6千人である。ところが教員養成課程の卒業生の合計は、15万6千人にすぎず、全員が教員になっても、全国的には10万人規模の教員が不足する事態が予測される。私学の教育学部や一般大学から教員になる大卒者、教員免許を持っている非常勤講師など総動員しても需要はなかなか追いつかないことが見通されるのである。おまけに18歳人口の減少から教員養成課程自体がどれだけの学生を吸収できるかも見通しは暗いと思われる。

こうした事情を背景にすれば、地元の教員需要が全国の動向に飲み込まれる以前に、人間発達科学部も明確な教員養成についての独自の量的な分析と見通しのもとで、充実した教員養成のプログラムを確立し実践していくことが、必須の課題だと思われるのである。

発達科学部になっても、教員を志望する入学生を豊かな教職授業と実習を履修させ、確実に力量のある教員として育て、送り出す意義と使命を確実に保持し続けることが、教員の需給関係からみても望まれるのである。教育実践総合センターはぜひその中核として機能して頂きたいと願っている。

センター助教授 稲垣 応顕

学校教育相談部門では、今年度も外部講師を招いての3回シリーズの「発達と臨床の心理学講座」を行った。この講座は、前半を外部講師による講義、その講師に後半を学内教員（学校教育部門所属の塚野・稲垣、日俣客員教授）を加えたメンバーをパネリストとしたミニフォーラムで構成した。参加者は、第1回73人、第2回63人、第3回70人で3回とも出席の54人に修了証書を授与した。

第1回（平成16年11月13日）講師：岐阜大学助教授 平澤紀子先生

テーマは、「教室で気になる子供の支援—軽度発達障害児に着目して—」であった。先生は、発達障害の概念定義を示した後、学習障害、注意欠陥／多動性障害などについて、その特徴を説明した。また、それらの子供たちが有する生活の不具合について具体的に話した。その上で、彼らと関わる際の配慮事項として、子供の側に立つこと、障害を特別視して問題と捉えるのではなく、あくまでその子の成長のために何が大切か、の視点を持つことの大切さを強調した。

第2回（平成16年11月20日）講師：武蔵野短期大学助教授 芳賀明子先生

テーマは、「教室で気になる子の支援—いわゆる「ふつうの子」に着目して—」であった。先生は、「気になる状態は、決定的な問題になる一歩手前」と考える必要があると述べた。そして教師や親は、その子がやや不適応の状況のうちに支援を開始すること、その内容として①気づいたことを伝える場を作ること、②気づいたことに、出来ることから始めること、③気づいたことの意味を多様に検討すること、をすすめた。

第3回（平成16年11月27日）講師：筑波大学教授 新井邦二郎先生

テーマは、「昔の子どもと今の子どもの生き方」であった。先生は、まず経済の高度成長と共に、子供たちに今日的な反社会的・非社会的問題が深刻になっていることを指摘した。また、現代の子供たちの心理的問題として、モラトリアムの延長、刹那的な様相、物事をパロディとして受け止めようとする事などを掲げた。その上で、家庭また学校、地域における躰のあり方を具体的に見直す必要があることを述べた。



報 告

人間関係作りゲームの研修会

センター助教授 稲垣 応顕

学校教育相談部門では、現職の先生方を対象として、「人間関係作りゲーム」の研修会を行った。日時および場所は、8月21日・8月28日の土曜日、いずれも13時30分～16時30分の3時間、教育学部附属教育実践総合センターのグループカウンセリング室であった。また、この研修会のねらいは、ポジティブな雰囲気での学級作りに生かせるサイコエデュケーションとしての本手法になじんでもらうこと、実際に学級で使えるエクササイズを修得してもらうこと、であった。

ちなみに、構成的グループエンカウンターは実存カウンセリングの考え方に依拠しあくまで個人の自己受容の向上をねらいとする。したがって、シェアリングを最重要視する。それに対し人間関係作りゲームは、行動カウンセリングの逆制止の考え方に依拠しているため、はじめから集団を対象とし必ずしもシェアリングを必要としない。

研修会は、全県の小・中・高・養・盲・聾学校などに参加希望者の募集を投げかけた。それに対し、約50名の応募があった。ただし実際には、実習を伴う研修会のため先着順で40名の先生方に参加していただいた。

第1回目は、「集団の雰囲気を浴するゲーム」をテーマにメインファシリテータ（全体の進行役）を日俣順子客員教授がつとめた。内容としては、誕生日チェーン・人間ボーリング・氷鬼、など体を動かすエクササイズを行った。また2回目は、「集団の意思決定能力を高めるゲーム」をテーマに、メインファシリテータを筆者がつとめた。内容としては、スクウィグル画の作成・砂漠で遭難したときにどうするか、など互いの気持ちを思いやりながら集団の方向性を決定していくというデスクワークによるエクササイズを行った。

参加者からは、「学級作りのいい勉強になった」「いつもは、少し離れたところから子供たちを見ていたが、今日は活動の中に入って、しかも楽しかった」「自分も勉強して、使えるネタを増やしていきたい」などの感想が寄せられた。なお、2回の研修会に欠席者は無く、全員に修了書を授与した。



母親の笑顔を支える

センター客員教授 日俣 順子

「心の教育相談室」が教育実践総合センター内に設けられてから5年。様々な方からのアクセスや訪問がある。そのほとんどは、子どもの突然の不登校や、問題行動に混乱なさっているお母さん方である。そうした時、お話を聴き、気持ちを受け入れることによってほんの小さな安定であっても提供することができれば、それが、子どもの行動変容につながっていく。母と子の心の結びつきは密接であり微妙である。

そんな相談の中で、私たち教育に携わるものに警鐘を与えていただくことに多く出会う。その一つが、学校や教師が子どもや母親に与える緊張感やストレスである。母親の不安の中で大きなウェイトを占めるのが、学校や教師の言動に対する不信感である。

それが、どんなに善意に基づき、気を遣ってなされているかを承知しつつも、土足で入り込まれるような威圧感を母親は感じてしまう。教師が、母親の不安を受け止める前に、「こんな方法で試したら」とこともなげに助言されることに母親は神経を逆なでされたように感じてしまう。こうした母親の不安や緊張が、子どもの状況をどんどん悪化させていく。あつい情熱のほとぼしりから出る言動であっても、この悪循環を助長させこそすれ、断ち切ることはできない。

どんな要因からにせよ、傷ついてしまった子どもの心を和らげ、元気を取り戻させる最も大きな力を持っているのは母親であることを、私たちは忘れてはならない。子どもの年齢が低いときには特に顕著にあらわれる。

「今日、お母さんがにっこり笑ってくれた。僕はほっとした。教室のみんなに会いたくなった。」不登校から立ち直る直前の2年生の子どものことばである。母親の笑顔を支えていきたいと思う。

表 平成16年度におけるセンターの相談件数

	面接による相談		相談件数
	学内者	学外者	
本人のみ	22	0	22
保護者のみ	0	52	52
学校関係者のみ	18	27	45
本人と保護者など複数	0	336	336
教師個人	0	0	0
合計	40	415	455

※学内者とは附属学校園を含む。

寄稿

学部および附属学校共同研究 プロジェクトが示唆するもの

教育学部助教授 黒羽 正見

昨年度に引き続き、学部および附属学校共同研究プロジェクト（ここでは、「生活・総合研究グループ」を意味し、以後「プロジェクト」と呼ぶ）は、年度初めに「この指とまれ方式」で仲間を集め、1年間研究を続けてきた。今年の研究課題は、「生活科・総合的な学習の富山県の現状分析を通して、生きる力として生活・総合的な学習を展望すること」である。そこで、各自の実践事例をナラティブ的に分析しながら自身の実践の自己点検を図ることで、富山県の今後の生活・総合的な学習を考えることにした。各自が自身の実践を自己点検するとは、教師の成長の基底条件ともいべき教師のパーソナリティ成熟のための不可欠な手立てとしての教師自身の「自己省察」(self-reflection)を意味する。教師の日々の教育実践には、不可避的に不確実性という性質が含まれており、それが展開される特定状況による規定を強く受けるという特質がある。したがって、教師が自らの実践の意味・性格・機能についての反省的理解を継続的に、しかも技法的次元に止まることなく、自らの人間としての全体的な有り様（パーソナリティ）の次元にまで分け入って行わなければ、十全な成長発達を遂げることは困難である。そのため、本プロジェクトでは、自らの潜在力や発達可能性を探る「話し合い」による「自己発見」(self-discovery)の営みが極めて重要であると考えた。この「自己発見」の核を構成する営みが、「省察」(reflection、一般に日本語では「反省」といわれている)である。すなわち、省察とは人間性についての意味深い潜在力を反映した価値を含んだ概念であり、精神作用である。教師にとってのこの自己省察の契機は4種類の契機が考えられる。つまり「日常の実践での何気ない気づき」「勤務環境等の変化」「公式的に他者から評価を受ける機会」「深刻な事態（問題場面）への遭遇」である。この中で、とりわけ、「日常の実践での何気ない気づき」という契機は、感受性が鋭く、達成意欲が高い教師にとっては、格好の自己省察の契機となる。次の齋藤喜博の言葉は、この「自己省察」という事情をよくいい当てている。すなわち「教師の仕事は、いつでも悔いの連続である。もっと力があれば、あのときはあのようにしなくてもよかった、いまの自分なら、このようにしたのにと、悔恨だけがいつも教師には湧いてくる。創造者としての仕事をし、成長していく教師であればあるほどそういう心は強い」と。

本プロジェクトは総勢14名で、勤務外の午後5時以降の限られた時間の中での学び合いであり、十分な時間と環境という面からの不備は否めない。しかしながら、子どもの学びの保障には、まずプロジェクト成員各自が、子どもと共に伸びていこうとする意志を形成することが不可欠である。個別教師の成長発達があってこそ、生きる力としての生活・総合の学びは保障し得ると考える。研究はまだまだ不十分である。しかし、表面的なスムーズさよりも、内部でたぎるマグマのようにいかないまでも、互いの活力（問題）をぶつけ合う研修（学び合い）を通して同僚性を育み、個々の教師が協働性を追求してきている。研究に関する知識の有無も大切であるが、それ以上に大切なことは、プロジェクト成員のまなざしから看取できる〈学ぶことに対する謙虚さ〉と〈学ぶことへの飢餓意識〉を併せ持っていることであると確信している。知識や経験の浅さなどによって、学習計画立案や実践過程で様々な蹉跌が起こったとしても、計画通りにスムーズに流れる学びより、むしろ教師個人が多量の蹉跌を経験しながら、自分が納得・了解して少しずつであるが、着実に歩む学びの方が、はるかに本質的であると私は思う。

学園通信

附属4校園の先生方について、各校園での取り組みや学部とのかかわりについてお伺いしました。

幼稚園では、

昨年度は「遊びをみつめて ～環境の構成から夢中になる姿を考える～」という研究主題で、一昨年の研究で解明された“子どもたちが夢中になる要因”を踏まえ、継続的に研究を進めてきました。まず子どもの内面をしっかりとらえた上で、保育者が子どもにどのような育ちを願うのかをはっきりさせ、そのために、夢中になれる環境をどのように構成すればよいのかを考察してきました。

この研究を進めるにあたって、各学年毎に年少組には吉見先生と水内先生、年中組には黒羽先生と竹井先生、年長組には小林先生と松本先生と、学部から総勢6名もの先生が保育研究のサポートについてくださいました。オープン保育を通し、継続して子どもたちの姿を見ていただき、子どもの見取りや教材研究面など、研究の視点について多くの示唆に富んだアドバイスをいただくことができました。アットホームな雰囲気、意見交換をしながら共に考える機会をもつことができ、大変有意義であったと思います。

また、研究面以外では、“トーク&トーク”と題し、5月には松本先生が、10月には小林先生がご専門の分野から、保護者向けにご講話くださり、参加した保護者からの好評を得ました。

現在、吉見先生と当園副園長を中心に、教育課程・指導計画の見直しを進めています。幼稚園教育目標である「子どもらしく、のびやかに、いきいきとした子」「自分で考え、行動し、責任をもとうとする子」「まわりのすべてに心をかよわせて生活する子」から望ましい保育の要素を設定し、その視点から幼稚園の教育課程・指導計画を見直していきたいと考えています。

これまでの研究の積み重ねと新しい取り組みがうまくかみ合っていますね。随所で、温かい雰囲気を感じることができます。

学校では集団で学ぶことのよさを最大限に生かしたいともおっしゃっていました。

一昨年度より「対話する子供を目指して」という研究主題で新たな研究がスタートしました。「対話」と取り上げたことは、この30年来研究を積み重ねてきた「かかわり」「学び合い」の研究の集大成をするとともに、未来を見据えた社会に必要不可欠な「対話」をさらに一層推し進めようという新たなスタートであることも意味します。

この研究では、学部の先生方にもリーダーシップをとっていただいたり、陰で支えていただいたり、他分野にわたってご協力をいただいております。宗先生、山西先生、神川先生には、研究協力員として、研究の理論を固める部分でご示唆をいただいております。また、環日本海交流を含めた国際交流学习、ITを活用した学校図書館・ネットワーク管理の推進では、新里先生、稲垣先生、高橋先生をはじめ、留学生や学生さんたちの力を借りて、外国語の授業や文化交流を進める授業を行っております。

目の前の子供たちの健やかな成長と、その子供たちが担う未来に貢献する教育活動になるよう、今後研究や実践を積み重ねていきます。

小学校では、

中学校では、

今年度も「主体性の高まりをめざす課題学習」を研究主題とし、「確かな学力を身につけさせるための指導と評価」の解明に取り組んでいます。「生きる力」を育成し、「確かな学力」を身につけさせるためには、系統性を踏まえた研究が必要だと感じています。その研究、実践を進めていくためには、学部教官による理論的な裏づけも必要になってきます。今後も附属学園、学部との連携を深め、継続的な共同研究を大切にしていきたいと思っています。

生徒の「心の健康」を高める活動にも、大学との連携を密にしながら取り組んでいます。今年度は、研修会「カウンセリングを生かした学級経営」、生徒、保護者、それぞれを対象としたカウンセリング、「ハートケアフレンド（カウンセリングの訓練を受けた大学生によるボランティアでの活動）」などが行われました。大学の先生方、学生さんたちの力を借りながら、これからも生徒の「心の健康」をサポートする環境づくりに取り組んでいきたいと考えています。

今日的な課題に真っ向から取り組んでいる姿勢と意気込みが伝わってきます。

体も心も健康であることが大前提ですね。学生の参加も活発のようです。

学部と附属養護学校の連携が、学生を支え、児童生徒を高めていることが分かりました。

“支援ツールと言えば、富大附属養護”と言われるようになりました。

養護学校では、

教育実習が終わった後も本校を訪れる学生さんたちの姿をよく見かけます。ボランティアとして活動を共にしたり、あるいは、授業の一環として発達検査を行ったり、児童生徒に役立つ支援ツールや教材を作成したり、また、学習発表会など児童生徒の日ごろの学習成果を披露する場をわざわざ見に来てくれたりしています。

児童生徒たちは、学生さんの姿を廊下で見かけると直ぐに駆け寄って挨拶をしたり、大急ぎで教室に戻って「〇〇先生が来られたよ～」と大声で友達に知らせたりします。再会を楽しみにし、心から喜んでいる様子を見ると、私達大人までも嬉しくなります。実習が終わればそれでおしまいではなく、知り合えた児童生徒を可愛く思い、実習でのつながりを大切にして見守り続けてくださる学生さんの気持ちと行動を嬉しく思うと同時に、このような学生さんの気持ちを支え、支援してくださる学部の先生方のバックアップに感謝しています。

このようなつながりをより深め、意味あるものとして継続させていくには、教師として児童生徒の表情や行動を細かく見つめるのと同様に、学生さんのかかわりにも注意深く目を向け、素晴らしいかかわりや、ほほえましいエピソードなどを本校から学部へと情報を返していく事が必要なのかも知れません。そしてまた、附属各校園にも情報を広めていく事が大切なのではないだろうかと感じています。

学生さんの存在が学部と本校との、そして附属各校園の掛け橋として、立場や年齢が違って、一緒に児童生徒を包み、支え、見守っている、一緒に育てている、そう実感できる今のつながりを大切に、そしてより良いものにしていきたいと思えます。

報 告

マルチメディアセミナー

センター助教授 小川 亮

平成17年2月26日（土）に第4回のマルチメディアセミナーを開催しました。会場は実践総合センターの1階の演習室で行いました。小学生3名、中学生2名、幼稚園児1名、父親2名と学部学生16名が5つの班に分かれて、デジタルビデオ作品を制作しました。講師は今年も、アップルコンピュータの三木功次さん、アップル公認インストラクターの渥美聡子さんのお二人にお願いしました。



講師の話を聞いて



まずは打ち合わせ会議



それから撮影

午前中に、簡単な作品の作り方（テーマの決定、ストーリー作成、絵コンテ）とカメラの使い方の説明を行ったあと、実際の作品作りを行いました。いつものことながら、子どもと学生とが一緒になって作品を作っていき姿を見るのは楽しいものです。子どもたちも、大変楽しそうに、かつ集中して作品作りに取り組んでいました。幼稚園の年少組の子どもさんにも、最後まで参加していただくことが出来て良かったです。大人も子どもも、作品を楽しんでいました。



みんなで作品鑑賞会



各班の作品の1カット

報 告

ビジュアル・トライアスロン

センター助教授 小川 亮

平成16年12月3日から5日にかけて、ビジュアル・トライアスロン2004を3日間の日程で開催しました。この研修会は学部学生を対象にマルチメディア作成の最先端の技術を習得する機会を設けることを目標に、短期集中で作品を作りながら技術を学んでいこうとするものです。これで3年目を迎え、学生の技術も年々向上してきたので、今年は日程を2日間（30時間）から3日間（48時間）に延ばして実施しました。講師としてマクロメディアの三木功次さん、アップル公認インストラクターの渥美聡子さんのお二人に来ていただきました。また、ゲストとしてスタジオ・ハップハンズの林拓也さんもお迎えし、学生の指導をしていただきました。富山大学側からは、教育学部の上山先生、鼓先生、小川が指導と会の運営にあたりました。また大学院生の笹倉さんにもいろいろと手伝ってもらいました。

始まりは12月3日の夕方からでした。作品作りに使う Final Cut Pro 4 の使い方や、映像の取り方について解説を聴いてから、自分たちを撮影したり、撮影したビデオを取り込んで編集したりする講義と実習を行いました。1日目の夜から作品のシナリオ作りと、撮影、材料集めを開始して、作品作りの期限は3日目（5日）の昼の12時と設定されました。途中で、何回か経過報告を入れながら、学生が3名から4名で1チームを作って作品作りに取り組みました。今年は、効果音やBGMも自分たちで作ることが求められたので、48時間でも時間が足りないくらいだったと思います。

3日目の午後は作品の発表会と講評、そして作品の保存、片付けをして終了しました。5つの班が作品を作り上げました。今年はなぜかちょっと暗めの作品が多くて、昨年とは対照的でした。昨年在CMフィルム作りだったのに対して、今年はテーマ自由の作品作りだったことが影響していたのかもしれませんが、技術的には、それぞれ高い作品が出そろいました。下記のURLに作品が公開されていますのでご覧ください。

<http://www.cerp.toyama-u.ac.jp/vt2004/>



A 「Haichi All C」



B 「パンと珈琲」



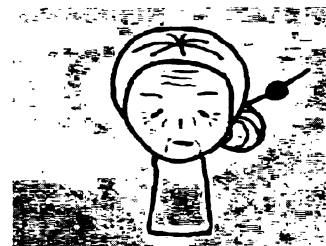
E 「LIFE LINE」



B 「Switch」



D 「境界線」



F 「待ち合わせ」

学生たちが作り上げた作品の1カット

センター教授 佐伯 真人

今年度の国際理解・開発教育研修会は、「参加型学習・ワークショップの体験を通して」というテーマで、11月27日（土）と12月4日（土）の2週にわたり、同志社女子大学教授藤原孝章先生を講師に迎えて行われた。その趣旨についてはチラシで次のように呼びかけた。

「総合的な学習の時間」では、教科と関連づけた学習や発展的な学習との関連など、単なるr活動におわらない「中身のある」学習が模索されています。参加型学習は、学習者の興味・関心は気づきを引き出すとともに、活動を通して内容理解や問題解決への導入を図る学習として注目されています。

研修会では、活動が教科とどう関連するのか、活動を通して得た気づきや学びをどう発展させていくのか、といった問題意識から、国際理解教育・開発教育の意義やねらいについて理解を深めていきたいと考えています。

各回の様子を報告する。

1 「貿易ゲームを通して考える参加型学習の意義とねらい」

会場：附属教育実践総合センター

貿易ゲームは、あらかじめ不公平に分配された紙と道具を使って富の蓄積を競い合うゲームである。これにより、先進国と途上国の経済格差を体験的に理解し、そこから引き起こされる貧困や開発の現状、持続可能な開発、地球環境について考察を深めることをねらいとしている。

ゲームの後、その意味や実施についての講義と話し合いが行われ、参加者からも活発な意見が出された。事後に「すぐに実際の授業で活用してみた」という参加者からの声が寄せられた。（参加人員23名）

2 「JICAピーストークマラソンのポスターを活用して考えるワークショップの意義とねらい」

会場：サンシップとやま

JICAの「ピーストークマラソン」と連携し、そのポスターなどを使い、「毛糸を使った考えよう」の手法を使い、平和や安全について考え、一人ひとりが日々の暮らしや国際協力のなかでできることを考えようとするものである。具体的には、①子どもの死、②安全な飲み水、③地雷・軍縮、④初等教育、⑤森林伐採・植林（地球環境）、⑥生活・貧困、⑦平和といった課題を示すポスターをもったグループが、他のグループとの関連性を見出して相手と交渉し、合意が得られると毛糸でつながっていくというゲームの形をとったワークショップである。これにより、課題とその解決が相互に関連していることを体感し、平和や安全について考えることをねらいとしている。

参加者からは、「地球的な課題について学べ、かつ、批判的に考える力や説得力、交渉力が身に付く」、「単に毛糸を巻き付けていくのではなく、そこで議論がなされ、互いの考えを深めあえることができてよかった」、「多角的に物事を考える場面で、このようなワークショップを活用してみたい」、「問題の原因や背景を私感だけではなく、論拠となる資料をもとに調べるのがよかった。国際関係のみならず、ホームルームで対人スキルや理解を深めるのにも使えそうだ」といった感想が寄せられた。



報 告

□ 子どものふれあい体験 □

センター教授 佐伯 真人

今年度の「子どものふれあい体験」は、次の5つのコースで実施された。()内は担当教員)

①科学で遊ぼうコース (市瀬和義)

②ものづくりコース (竹井史)

③遊び援助コース (小林真・生田貞子)

④学習障害をもつ子どもへの援助コース (武蔵博文・水内豊和)

⑤野外活動コース (広瀬信・黒田卓・佐伯真人)

例年はオリエンテーションの際に説明しただけであったものを、今年度は、立山での新入生合宿においても各担当教員からの説明を行ったことや、昨年度初めて作成した報告書を新入生に配布したこともあってか、当初登録した人員は100名を越し、例年を大きく上回る学生の参加がみられた。

一年間の活動の成果を発表し他の経験も参考にできるように、「子どものふれあい体験交流発表会」が2月23日(水)に開催された。ここまで活動を続けた学生は85名を数えることができる。この発表会での報告などから、ふれあい体験の感想を拾ってみる。

・子ども達と実際に接することができてよかったし、いい経験になった。・準備など大変なことはあったけど、本番では子ども達に喜んでもらうことができたし、とてもやりがいがあった。

(科学で遊ぼうコース)

・一つのことをやり遂げることのすばらしさや、仲間たちと共に協力して頑張ることの大切さを学ぶことができ、自分を大きく成長させることもできた。・いろいろな子どもがいて、一人ひとり違った反応をする。そんな子どもたちとのコミュニケーションを通して、時と場合に応じた接し方ができるようになった。

(ものづくりコース)

・子どもの成長を一年を通してみることができた。・子どもたちは元気いっぱい、私の方が子どもたちから元気をもらっていたような気がする。

(遊び援助コース)

・甘やかすと優しさの境界線を見極めることの大切さを学んだ。・何度も活動に参加していくにつれて、子どもの様子を冷静に捉え、手助けをすべきタイミングがだんだんと分かるようになった。どのような言葉をどのようなタイミングでかけるかの難しさを知った。

(学習障害をもつ子どもへの援助コース)

・子どもたちの楽しい思い出は、安全で無事に企画を進めていくという条件があって成り立つものだと改めて思った。・教師経験のあるスタッフの、子どもへの指示や叱る様子はとても勉強になった。

(野外活動コース)

本年度は学生による準備委員会を発足させ、発表会の資料作成、進行などを運営させた。学生は積極的に活動し、ここに現れている学生の意欲は、1年間継続した活動の成果という一面もあると考えられる

事後の担当教員の会合では、今年度の前進を踏まえながら、今後はそれぞれのコースが相互に協力して、学生の主体的な活動をさらに進めるなど、ふれあい体験の質的な向上を図ることが必要であることや、ここでの経験を2年次以降にどう発展させるかなどの課題が確認された。大きな可能性をもった事業であるだけにより充実したものにしていくことが望まれる。

報 告

放課後学習チューター・ 学習活動サポート事業

センター教授 佐伯 真人

昨年度から始まった放課後学習チューターを実施していた3校が今年度も継続したほか、新たに学習活動サポート事業として6校が加わり、多くの学生が参加、活動した。今年度は、学年の制限をなくし、また他学部学生にも呼びかけた。その結果、夏休みだけの参加を含めて70名の学生が参加した。

遠距離の学校が多かったことから学生の確保が難しかったこと、学生の空き時間と活動との調整が難しかったことなど、課題も多くあったが、実施した学校においては多くの利点がみられたと報告されている。子どもたちの学習意欲が増したことや、先生方により影響を与えたことなどである。もちろん、参加した学生の体験はとても貴重なものであった。学校によって多様な形態であるが、今年度で修了する放課後学習チューターについても、次年度も継続を望む声が保護者から多く寄せられているという。

参加学生の声を聞いてみた。

- チューターでは、個々の子どもたちが求めている学習ニーズについて学ぶことができました。授業内では、個別のニーズまで満たすことは難しいですが、チューターでは一人ひとりの子の学習の現状に合わせて弱い部分を補うことができます。ニーズに対する知識と少人数指導の基礎を教育の現場で学ぶことができました。
＜田中謙（教育学専攻1年）富山市立神明小学校＞
- 桜谷小学校では「たまご教室の先生」として、チューター活動を行ってきました。漢検、数検に向けて一生懸命取り組む子どもたちの姿に励まされ、教えることの喜びを感じることができました。二年間の活動をとおして、初めは不安定だった私のたまごも、今では教職への確かな思いで、成長させられた気がします。
＜安平純子（国語教育専攻4年）富山市立桜谷小学校＞
- 放課後だけでなく、授業中のサポートもさせていただきました。実習とは違う普通の学校、教師の様子を見ることができ、子どもたちとふれ合っていくうちに教師を志望する想いが一層強くなりました。学校の講義だけでは身に付かない実践的な力を得ることができ、よい経験となりました。
＜松島麻里（保健体育専攻3年）魚津市立荻生小学校＞
- 朝日中のサポーター活動では、3年生の個別指導や授業にも参加させていただきました。最初の頃はわからないことだらけでしたが、途中からは生徒に会うことが楽しみになりました。実習前に学校で生徒と触れ合うという貴重な経験ができ、本当によかったです。
＜寺崎あゆ子（国語教育専攻1年）朝日町立朝日中学校＞
- 今回の活動では、大変貴重な体験ができました。授業のみならず、様々な学校行事に関わることもでき、新しい発見や体験が多くありました。また、長い期間にわたって子ども達と接することができ、子ども達の成長をはっきり感じることができました。子ども達の「わかった」の声、とても嬉しくかんじられました。
＜西海裕一（教育情報システム4年）高岡市立定塚小学校＞
- 学習サポーターの活動では、放課後学習等の時間に生徒一人ひとりの質問にじっくり答えることができました。分からなかった問題が解けた時の生徒の嬉しそうな笑顔を見る度に、学習サポーターになってよかったと感じました。一年間を通して生徒と接することができたのはとても貴重な経験だったと思います。
＜甲野和美（国語教育専攻4年）高岡市立五位中学校＞
- 福野小学校では1年～6年希望者を対象とした個別学習支援、実際の授業においてTT指導を行いました。開始当初は児童とどう接していいか困惑しましたが、次第に児童から積極的に質問や添削を求められるようになりました。この活動を通じて児童の学習の様子を知ることができ大変いい経験だったと思います。
＜小原健太郎（社会科教育専攻1年）南砺市立福野小学校＞

放課後チューターとして実施していた富山地区の3校が、本年度で事業を終了する。この経験の大きな意味を考えると、なんらかの形で教育現場に学生が日常的に参加することを検討したい。

〔第65回センター協議会〕

平成16年9月22日(月)に第65回国立大学教育実践研究関連センター協議会が、メディア教育開発センター(千葉県千葉市)を会場に開かれた。塚野(教育臨床部門)、佐伯(教師教育部門)、小川(教育実践部門)の3名が参加した。当日は前半が全体会、後半が分科会という日程であった。前半の全体会では、近藤勲会長(岡山大学)から講演があり、今後の教育学部の実践センターのあり方について述べられた。学内学外から必要とされる実践センターであることが存続の条件であるという趣旨であった。後半の分科会は、3つの部会にそれぞれ参加した。教育工学情報教育部門では、メディア教育開発センターとの共同研究プロジェクトとして3つの部門が協力してビデオ教材を作成する件について報告がなされ、部門としては分担してメディアの利用方法について教材を作成していくことになった。

〔第66回センター協議会〕

平成17年2月15日(火)に第66回国立大学教育実践研究関連センター協議会が、学芸大学を会場にして開かれた。午前中からの日程で、午前中は全体会、午後は分科会という構成であった。出席者は市瀬センター長、佐伯、小川、稲垣の4名。小川は前日の理事会から出席した。

全体会は、文部科学省の挨拶、近藤会長の挨拶(各大学における実践センターの生き残り実践研究関連センター協議会の重要性について)からはじまり、APECの報告、メディア教育開発センターとの共同研究プロジェクトといった話題が中心であった。午後は、3つの分科会に分かれた。市瀬・佐伯は教師教育の分科会に、小川は情報教育関連の分科会に、稲垣は教育臨床の分科会に出席した。情報教育の分科会では、10月に話し合われたビデオ教材の作成状況について報告が行われた。

【日本教育大学協会北陸地区会教育実践研究指導部門研究協議会】

平成16年11月24日(水)・25日(木)の日程で、表記の会議が開かれた。会場は信州大学教育学部のしなのき会館研修室であった。福井、金沢、富山、上越教育、新潟、信州の各大学が参加し、富山大学からは佐伯、稲垣、市瀬の3名が参加した。内容は以下の通りであった。

(1) 協議事項**① センターの将来構想**

どこの大学も、今後のあり方について問題をかかえているようであった。富山大学は特に新しい学部になることから、どのような形になるかについて質問があった。客員教授の任用を各大学で工夫していることや、センター紀要のあり方が参考になった。

② 専門職大学院、教員免許制：情報交換が主で、まだどこも具体化していない。

③ e-Learning：各大学で授業レポートなど進められている。学長裁量経費などが認められてコンテンツの開発に信州大学では取り組んでいる。

(2) 承合事項

・中期目標とセンター：各大学により様々。まだ始まったばかりで、これからという印象をうけた。

(3) その他

大学によっては人員削減の対象になるなど危機的なところもあった。今後大学がセンターを地域連携の核にしていこうとするとき、センターの役割は大きい。「実践学」の構築、センターの目に見えない活動を「本務」として評価してもらうよう努力するなどの話題が出た。

業務報告

センター日誌

平成16年度の実践センターの主な行事

- 平成16年
- 4月 6日 センター会議 (第1回)
 - 5月 7日 センター会議 (第2回)
 - 6日～7日 教育実習事前指導
 - 13日 センター会議 (第3回)
 - 14日 附属教育実践総合センター運営委員会
 - 6月15日 センター会議 (第4回)
 - 7月13日 センター会議 (第5回)
 - 教育実習事前指導
 - 28日 センター会議 (第6回)
 - 8月21日～22日 人間づくりゲームの研修会
 - 30日～31日 教育実習事前指導
 - 9月 1日 センター会議 (第7回)
 - 教育実習運営委員会
 - 7日 センター紀要編集委員会
 - 21日～22日 第65回国立大学教育実践センター協議会(メディア教育開発センター)
 - 28日 センター紀要編集委員会
 - 10月 1日 センター会議 (第8回)
 - 8日 日本教育大学協会全国教育実習研究部門研究協議会(北海道教育大学旭川分校)
 - 11月 4日 センター会議 (第9回)
 - 13日 発達と臨床の心理学講座-教室事情の変化とその対応- (第1回)
 - 20日 発達と臨床の心理学講座 (第2回)
 - 24日 日本教育大学協会北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会(信州大)
 - 27日 発達と臨床の心理学講座 (第3回)
 - 27日 国際理解・開発教育研修会 (第1回)
 - 12月 3日～5日 ビジュアルトライアスロン2004
 - 4日 国際理解・開発教育研修会 (第2回)
 - 7日 センター会議 (第10回)
 - 教育実習運営委員会
 - 18日～19日 高校生ビジュアルトライアスロン2004
 - 22日 センター紀要第5号(通巻21号)発行
- 平成17年
- 1月 6日 センター会議 (第11回)
 - 2月 2日 センター会議 (第12回)
 - 23日 「子どもとのふれあい体験」体験交流発表会
 - 26日 マルチメディアセミナー
 - 3月 3日 センター会議 (第13回)
 - 31日 センターニュース第21号発行

印刷 平成17年3月31日
発行 平成17年3月31日
編集発行 富山大学教育学部
附属教育実践総合センター
代表者 市瀬 和義

〒930-8555 富山市五福3190
電話 076-445-6380